

会議録

1 附属機関の名称

犬山市公益的活動促進委員会

2 開催日時

令和5年7月25日（火）午後6時30分から午後8時20分まで

3 開催場所

犬山市役所 202・203会議室

4 出席した者の氏名

- (1) 委員 佐藤正之、水内智英、山本剛毅、遠山涼子、林加奈、谷口功
- (2) 執行機関 中村地域協働課長、島内課長補佐、佐藤統括主査、田原主査、柴田主査補
- (3) オブザーバー 協働プラザ 松浦恵子、森好佐和子、佐曾利吏佐

5 内容

○議題

- (1) 協働プラザの事業実績について（令和2年度～令和4年度）
- (2) 第Ⅱ期協働プラザの事業計画について（令和5年度～）
- (3) 犬山市協働のまちづくり基本条例の検証について

6 傍聴人

0人

7 内容

① あいさつ（佐藤委員長）

※ 委員総数7名のうち、6名が出席し、過半数であるため、犬山市公益的活動の支援及び市民参加に関する条例施行規則第6条第2項の規定により、会議が成立。

② 議事

- (1) 協働プラザの事業実績について（令和2年度～令和4年度）

資料1～2

事務局より配布資料に基づき、説明。

〈質疑応答〉

- ・委員：非常によい展開ができており、積極的に取り組んだ結果だと思う。今後に向けて、協働プラザで感じている、仕組みや人的な課題などはあるか。
- ・協働プラザ：コンソーシアムだからこそその強み、課題があった。職員にはそれぞれ得意分野があるが、相談対応などで、どの職員が対応しても一定のレベルが担保で

きるようにしていきたい。職員間の連携に課題があったので、情報を見える化する表の作成など工夫を行っている。

- ・委員：コンソーシアムのつながりを活かすことで、細やかな対応ができる。大きな問題が起こっていないことがひとつの成果だと思う。
- ・委員：フューチャーセッション@犬山の取り組みは、若者が主体的にまちづくりに参加するという観点で、県内でも独創的な事例であると思う。その中で、3件の事業が生まれているが、大変だったことや苦労したことなどがあれば教えてほしい。
- ・協働プラザ：「ありがとうプロジェクト」は、犬山青年会議所の全面的な協力を得て実施する方向となったが、集客の面で課題があったため、マルシェに出店する形でチャレンジするよう、協働プラザからアドバイスした。
「学生ボランティア向けのオンラインネットワーク」は、高校生達が団体を立ち上げたが、活動スタート時点から協働プラザが伴走支援を行い、地元で活動する事業者にも入ってもらいながら、活動を継続している。
- ・委員：社会福祉協議会などもボランティア情報の発信をしている中で、学生自身が情報を発信する方法を考えているのはすごい。それを応援する仕組みがあり、とても良いと思う。
- ・委員：安定して運営できていると思う。地域資源バンクといぬやまでばんの登録状況や事業実施に関して、課題や感じている可能性はあるか。
- ・協働プラザ：登録者自身が、Web ページへ活動や発信したい内容を上手く言語化できていない。今後は、情報をアウトプットするためのベース作りを支援していくことが、重要になると考えている。
- ・委員：情報を発信する人を集めるのと、活用したい人を集めるのでは、どちらが大変か。
- ・協働プラザ：両方とも大変であるが、現状ではどちらへの周知も足りていない。
- ・委員：町内会や自治会は、協働プラザを利用しているのか。
- ・協働プラザ：協働プラザ開設当初は、市民活動関係の相談が多かったが、最近は町内会関係者も少しずつ相談に来てくれるようになった。同じ施設内に、パソコン教室や社会福祉協議会があることで、町内会や子ども会の役員などが立ち寄り、協働プラザで活動の相談ができるということが認知され始めたのではないかと。市民活動、地域活動のどちらでも変わらず対応していく。
- ・委員：市民活動をどのように定義するかによるが、地縁による活動も広く市民活動に定義して支援している自治体もある。定義を改めて考えるのもひとつである。市民活動支援センターと町内会・自治会に溝がある自治体もあるが、協働プラザは社会福祉協議会や青年会議所とのつながりもあり、支援の間口が広く、より柔軟にできると良い。
旧市民活動支援センターから協働プラザとなり、新しいつながりもできたと思うが、運営主体が変わったことによって、つながりが薄くなった団体などへのケアはどうしているか。
- ・事務局：市民活動支援センターから協働プラザへの移行にあたっては、ソフトランデ

イングできるよう進めてきたつもりである。令和4年度に、市民活動支援条例を地域活動も含めた公益的活動の支援条例に改正するときも、当時のキーマンにインタビューし、過去の経緯や先人達の大事にしてきたものを聞き取るなど、これまでの活動も十分踏まえたうえで、進めてきた。

以前の運営主体の方も、都度協働プラザを訪れており、これまで培った人的ネットワークも活かしていければと考えている。

- ・委員：運営主体が変わると持っていたネットワークが大きく変わり、せっかくできた関係性も途絶える形になった例を多く見てきたが、犬山では関係性が途切れないよう、進めてほしい。
- ・事務局：協働プラザは、当初から町内会・自治会の支援も含めた拠点としていたが、なかなか認知されず、この3年間の大きな課題であった。第Ⅱ期がスタートした今年度から、町内会が集まる機会には、協働プラザ職員にも参加してもらい、役割や機能、できることなどを周知している。
- ・委員：町内会や自治会の所管と、市民活動の所管が違う自治体もあるが、犬山市は担当部署が同じであり、具体的な接点がどうできていくか楽しみにしている。
- ・委員：資料2「KPI 数値一覧 (R2-R4)」No.9 地域で直面している社会的な課題が5件あるが、どれも大事な案件であり、報告書はどのように共有されているか。現状も含め、教えてほしい。
- ・協働プラザ：課題の報告書は、実績報告とともに市へ提出している。この報告書の作成にあたっては、アンケートや聞き取りなどを実施し、課題の現状と、協働プラザができることを記載している。協働プラザだけでは解決できない課題も多く、市や関係機関と連携して進める必要がある。できることから進めている。
- ・委員：協働プラザでできることと、行政が関わらなければできないことがある。課題として出た事項を解決に向けて進めようとしている姿勢は見えた。他の分野にもつなげてほしい。

(2) 第Ⅱ期協働プラザの事業計画について（令和5年度～）

資料3

協働プラザより配布資料に基づき、説明。

〈質疑応答〉

- ・委員：コミュニティナースの事業は地域に展開されていく点で魅力的であり、期待できる。他の事業についても、これまでの実績を踏まえる形で計画されているように感じた。
- ・委員：事業計画表はどのように活用しているか。
- ・協働プラザ：仕様書をベースに、やるべきことを明確にするために使用している。
- ・委員：事業を進める中で、課題に感じていることはあるか。
- ・協働プラザ：コミュニティナース事業は、課題を感じる。犬山市では、既に活動している方が多く、自分達は既に十分活動できているから関係ない、という声も聞く。

協働プラザだけで、コミュニティナースの理解促進、周知を進めるのは難しいため、工夫が必要である。地域を巻き込んでいきたい。

- ・委員：もう十分に活動できているというのは、どこからの声か。
- ・事務局：地域の協議体やコミュニティである。協議体は、生活体制支援整備事業の中で、福祉事業所等が委託を受け、地域で課題を集める場として行われている。協議体の活動が軌道に乗るかどうかという段階であり、新しい話は受け入れがたいという声もある。そうしたことから、関係すると思われる人達を集め、コミュニティナースの事業を理解してもらうための場として、説明会を設けた。参加者がどこまで認識できたかは分からないが、福祉部門との連携はこれからの伸びしろであり、コミュニティナースが育成され、実践の中で連携していけたらと考えている。
- ・委員：民間団体の最大の利点は、色んな人達と直接つながれることである。全て地域協働課を通すという形でなくても良いのではないか。柔軟さも必要である。
- ・事務局：市の委託事業として、案件は把握しておく必要があり、毎週のミーティングなどで情報共有してもらっている。報連相はうまくいっていると思う。今後も情報共有や連携をしながら進めていく。
- ・委員：コミュニティナースの活動は可能性を感じる。
関市では、地域カルテを作成し、健康について地域ごとのデータを集めたが、健康の度合や傾向、課題が地域によって微妙に違うため、取り組むべき健康課題が見えてきた。地域ごとに細かく見ていき、対応していく。
コロナでこれまでの事業が中止になったまま、再開されていないケースもあると思う。拠点としている所で、活動できていない団体にアウトリーチしてみてはどうか。
- ・委員：コミュニティナース事業には注目しており、潜在的な可能性はある。進め方はどのようなイメージか。
- ・協働プラザ：1年目は10名の方が講座を受け、地域に入ってもらう予定である。どの地域に入るかは相談となるが、各地域で実際に活動して、そのコミュニティを盛り上げる一員となってもらう。また、モデル地区を作って進める形も考えられる。
- ・委員：地域から要望があった場合はどうするのか。
- ・協働プラザ：対応していくつもりであるが、地域への入り方は工夫していく。
- ・事務局：ベーシック講座は、その人の専門性、特性を活かして地域の中に入っていく内容を開発する講座であり、決まった型で行うわけではない。特性を確認した後に、協働プラザが各地域につなげていく。コミュニティナースの活動を発信して、イメージを持ってもらいつつ、地域の方からアプローチが来るような形を目指していきたい。
- ・委員：いぬやまでばんは、現状、スキルのマッチングやスペース貸しが多い印象である。既に民間でシェアリングエコノミーの事業がある中で、ニーズの把握はできているか。増やすためにどこにアクセスするか、広げ方の方向性をどう考えているか。

- ・協働プラザ：元の仕組みになっている地域資源バンクでは、窓口でのヒアリングを通して基本的な情報を登録している。一方、シェアエコで地域資源バンクの活用を行ういぬやまでは、WEB サイト上で利用者自身が登録し、問い合わせにも対応しているので、自分でつながっていきたい人にアプローチしている。市民同士が直接つながっていきけるようにシフトしていきたい。
- ・事務局：資源の情報をこちらから地域に取りに行くというのが元々のコンセプトであるが、まだ十分でないため、運営フローの見直し中である。どのようなニーズがあるのかを想定し、そこから提供できる資源を検討して情報を集めていきたい。

(3) 犬山市協働のまちづくり基本条例の検証について

事務局より現状を口頭で説明。

今後、検証を行うためのワークショップを開催する予定である。参加者などに対し、議論の材料として、第6次総合計画、市民意識調査や国勢調査の結果から抜粋した課題や数値などを出そうと考えている。

〈質疑応答〉

- ・委員：人口の変化がもたらす課題はどれも大事だとは思いますが、優先度がある。例えば、地域コミュニティの機能低下という課題では、地域コミュニティがなくなると何が困るのかという、もう少し先のことを掲げると良いのではないか。現在、町内会・自治会活動を担っている世代がさらに高齢化していく中で、地域の課題を認識して食い止めるためには、町内会・自治会も含めた地域のコミュニティが機能する必要がある。防災や防犯活動など、地域コミュニティがないと何が機能しなくなるかに焦点をあてても良い。
- ・委員：今後は、高校生や中学生が地域社会に関わることも増えていく。地域社会やコミュニティを構成するメンバーが未成年でも良いと思う。今後のコミュニティ形成には、子供達や学生の存在が重要になっていくのではないか。
- ・委員：地域コミュニティに課題解決の主体となることを期待しているが、コミュニティそのものの加入率も低下しており、その受け皿として対応できるのか。行政が作る計画など、あらゆる分野で横串しは刺さらないのが現状である。地縁組織のあり方を大切にしておかないと、地域での支え合いが縮小していき、その他全てが大変になる。町内会・自治会は大事な組織であり、地域において普段どのような活動が行われ、どう参加しているかというデータは見えると良い。災害だけでなく、ごみの回収や防犯で声を掛け合っているかという些細なところを数値化するなど、身近なテーマで提示できると良いのではないか。
- ・委員：第6次総合計画の議論の中では、地域社会の課題が課題間連鎖を起こす負のループがあるとされていた。今までは、単一のステークホルダーで解決できていたが、これからは様々な立場の人々が参加して解決していく必要があり、

そこに協働のまちづくり基本条例の意義が見い出せるのではないか。

また、地域社会の課題は多様であり、人口とは限らない。細かいデータよりも、課題を網羅したデータを出した方が市民参加につながると思う。

- ・事務局：地域コミュニティの衰退から生まれる課題は、行政の制度設計も影響しているが、課題は連鎖しており、だからこそ協働でのまちづくりが必要であるという流れが明確に感じられた。
- ・委員：市民活動団体への助成は昔からやっており、市民活動団体がどのような活動をしてきたか、何を課題としてきたのかを一覧にして出してはどうか。地域コミュニティの課題や活動も数値化できると良い。

③ その他

- ・羽黒拠点整備ワークショップの開催について
- ・委員会開催時間について